

皇學館史學第三十六号（令和三年三月 発行） 抜刷

史料紹介

水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」

.. 長島隆二についての回想

長谷川 怜

水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」

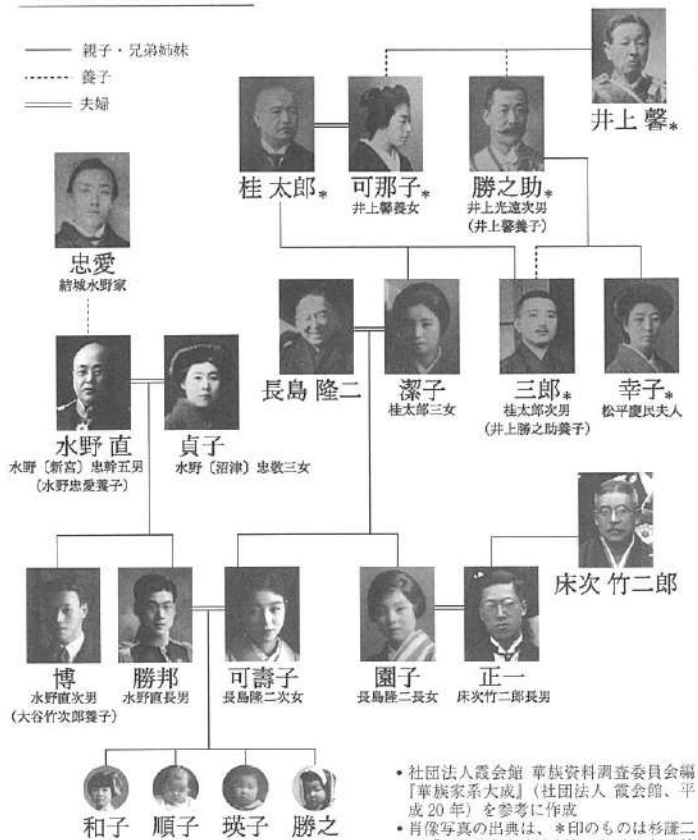
…長島隆二についての回想

長谷川 怜

はじめに

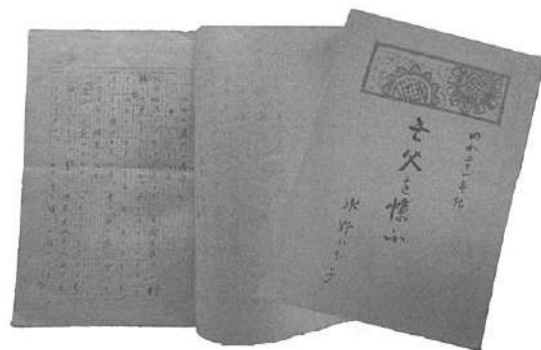
本史料は、明治から昭和期の官僚・政治家である長島隆二について、次女である水野可壽子（旧姓 長島）が昭和二十一年（一九四六年）^{〔1〕}に執筆した回想録で、原稿用紙三十七枚に筆記されている。現在まで水野家で保管されてきた。これまでも史料の存在は知られており、櫻井良樹「日中提携と「国民的新党」の創設」（『日本政治学会年報 日本外交におけるアジア主義』岩波書店、平成十年）において部分的に引用されているが、全文の活字化はこれまでなされていない。

水野家をめぐる縁戚関係



・社団法人霞会館 華族資料調査委員会編『華族家系大成』（社団法人霞会館、平成20年）を参考に作成
 ・肖像写真の出典は、*印のものは杉謙二編『華族画報』（至誠社、大正5年；筆者所蔵）より。それ以外は上田和子氏・水野勝之氏提供

としてしか伝えられない場合がほとんどである。活字化した回想録、両名がご所蔵の写真、証言を相互に関連させることで、これまで公にされてこなかった事実を明らかにできた。また、証言の中にはご本人の直接体験ではなくとも、言い伝えのように聞いた話も含まれており、水野家・長島家・桂家・井上家・床次家・大谷家（縁戚関係は家系図を参照）をめぐる広範な家の記録・記憶の一断面を再現したといえる。



水野可壽子「亡父を憶ふ」



長島隆二

東京帝国大学時代の明治35年に長島が水野直へ贈った写真。30年後、お互いの子ども同士が結婚することになる。

水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」・長島隆二についての回想（長谷川）

史料の翻刻を掲載するにあたり、まず執筆者である水野可壽子について説明し、続いて長島隆二の人生を簡単に振り返っておきたい。可壽子については、活字化された史料がほとんど存在しないため、長女の上田和子（旧姓水野）氏、長男の水野勝之氏からの聞き取り調査（オーラルヒストリー）を基に記述した。²² 旧華族家の縁戚関係や戦前期の生活の在り様については、公的な記録や印刷された新聞・雑誌などの資料からは充分に情報を引き出すことができないことも多い。とりわけ「生活史」すなわち日々の出来事の多くは、当事者の記憶

一、水野可壽子について

水野可壽子は明治四十四年（一九一一年）に長島隆二の次女として誕生した。長島の妻は桂太郎の三女潔子きよこであるから、可壽子は桂太郎の孫にあたり、名付け親は桂である。桂の三番目の夫人である可那子から「可」の字を、桂の幼名・壽熊から「壽」の字をもらったのである。

可壽子は聖心女子学院の小学校に入学し、後に成蹊女学校に転学した（第九期）。そして卒業後の昭和七年（一九三二年）、旧結城藩水野家の第十九代、水野勝邦（子爵）と結婚することとなった。双方の父親すなわち長島隆二と水野直なおしは東京帝大時代の親しい同窓生であったが、それが二人の直接的な縁ではなく、出合いは別の親族を介したものであった。当時、新宮水野家の武（忠武。水野直の弟）は京都に住んでおり、能や俳句に親しんでいた。武は竹屋春光（松平茂明の四男。竹屋威光の養子）と交友関係にあった。竹屋の叔父にあたる松平慶民よしまは井上勝之助（井上馨養嗣子）の娘幸子と結婚していた。勝之助の妹（可那子）³が桂太郎の夫人であったことから、竹屋・松平・井上の縁



可壽子と勝邦の結婚写真

戚関係によって桂家・長島家と水野家が結びついたのである。⁴可壽子と勝邦の披露宴は上野の精養軒で行われ、新婚旅行では大連や青島、上海などを約二ヶ月にわたり周遊した。⁵

ちなみに、長島家の長女園子は床次竹二郎の長男正一と結婚している。長島と床次は、共に政界を渡り歩いた存在であり、彼らが縁戚関係にあったことは興味深い。長島家は野方（現在の東京都中野区）にあったが、園子と正一の家も昭和十年代からそのすぐ前に位置していた。⁶



長島園子・床次正一結婚写真

中央左が園子、右が正一。左から2人目が長島隆二、右から2人目が床次竹二郎。後列左から2人目が可壽子。

結婚後、可壽子は昭和十年（一九三五年）に長女の和子を出産した。⁷子育てに忙しく「毎日唱歌を歌ったりして：一日中、何をするとともに、日が暮れてしまふ」⁸ような生活を送っていたという。その後、順子、瑛子、勝之に恵まれるが、順子は本史料にも記されているように、昭和十三年に生まれ七か月で夭折した。

この時、勝邦は外務省の調査員として北平（現在の北京）に駐在していた。日本に残された可壽子の悲しみは大変大きく、悲嘆に暮れる毎日だった。⁹

可壽子は生来明るい性格であった。桂家の親族の中では中心的な位置におり、親族会では常に人気を集めていた。祖父（桂太郎）、父（長島隆二）ともに政治家という「血」であろうか、人と人をつなげるのがうまく、男女問わず人の心を掴むようなところがあったという。長女の和子氏は「自転車を乗り回したり、ターキー（水の江瀧子）を見に行ったり、お出掛けも多く華やかな人だった」と回想する。

可壽子は多趣味であり、日本刺繍や洋裁を成蹊の友人



水野家・大谷家集合写真

前列左より、平松廉子、水野貞子、水野勝邦、水野可壽子、水野顕。
後列左より、大谷隆三、大谷トシ、大谷（水野）博、大谷トシ、大谷竹次郎。昭和11年～12年頃撮影。



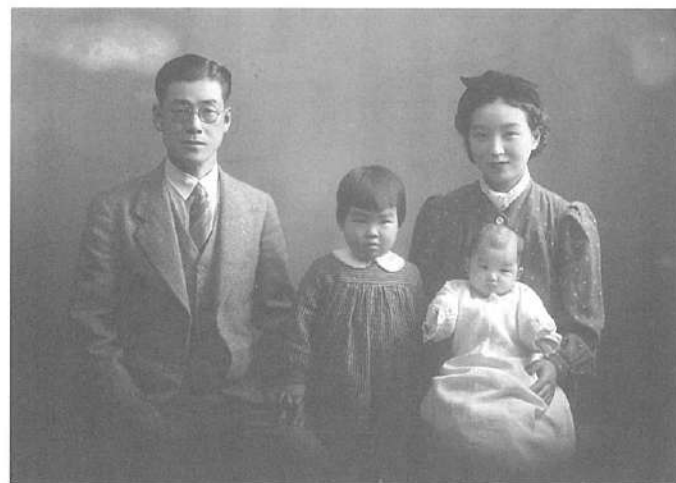
李香蘭を囲んで

水野家、大谷家の関係者たちと李香蘭を囲んで撮影。前列左から2人目より大谷トシ、李香蘭。後列左から大谷博、内山六郎、高峰三枝子、1人おいて水野勝邦、可壽子・瑛子、水野顕。昭和16年頃。



水野家・長島家・大谷家集合写真

①平松牛、②辰郎、③水野顕、④平松（水野）廉子、⑤長島隆二、⑥長島潔子、⑦佐野（とんとおばちゃん）、⑧水野可壽子、⑨水野（上田）和子、⑩満壽子、⑪大谷トシ、⑫大谷ツネ、⑬大谷（水野）博。昭和11年頃の撮影か



水野勝邦・可壽子・和子・順子

らと一緒に行っていった。また、勝邦の弟である顯が学習院の仲間と行っていった文芸活動「うたげの集い」(学習院と女子学習院の生徒が合同で行う活動)にも参加し、冊子「うたげ」にも寄稿していた。さらに、江口隆哉・宮操子夫妻が主宰した江口・宮舞踊研究所のスタジオが「府立高等前」(東京横浜電車。現在の東横線「都立大学」)にあり、桂友子(桂與一長女)と通いモダンダンスにも取り組んでいた¹⁰⁾。

その他、勝邦の弟の博¹¹⁾が大谷竹次郎(兄の白井松次郎と松竹を創業)の養子になっていた関係から、可壽子は大谷家とも深く交際していた。舞台を見に行くだけでなく、李香蘭と交流したり、ターキーと共に会食することもあった¹²⁾。

可壽子の精神面についても触れておきたい。彼女は仏教への信仰が篤く、母の潔子が信心していた百観音明治寺(中野区沼袋に所在)の草野昌悦尼¹³⁾に教えを受け、「沙羅の会」と称する集まりでお経をあげたり法話を聞いたりしていたという¹⁴⁾。

次女の順子を喪った翌年の昭和十四年、可壽子は長女の和子と共に勝邦のいる北平で暮らし始めた。

夫の勝邦は、学習院を卒業後、東京帝大に入学して「支那哲文学」を修め、卒業後は専修大学講師や外務省調査員となり中国研究に従事した。昭和十四年には、義父にあたる長島の日中和平工作に協力するため北平に水野公館を構えた(後述)。

可壽子らの北平での生活は平穩であり、家族で郊外へ散策やドライブに出かけた際の様子を撮影した写真も多く残されている。また可壽子は日常的に中国服を着て過ごすことも多く、公館の手伝い(女中)をする中国人をはじめ、現地の人々とも積極的に交流し、中国の文化に馴染んでいた。



北平の可壽子と和子



北平郊外へのドライブのひとつ

勝邦の愛車フィアット500。ナンバーは北京0846となっている。食事中であろうか、画面の端には可壽子と長女和子が写る。



中国服を着た可壽子
(麻布の自宅で撮影)

結婚してからというもの、可壽子の生活環境は大きく変化した。中国で暮したことを皮切りに、戦時中の昭和十九年(一九四四年)にはかつて水野家が治めた結城(茨城県)での疎開生活が始まった。結城で暮した家は水野直が大正時代、旧結城城に建てた平屋の木造小屋であった¹⁵⁾。疎開先では、長女の和子が学校の友人を家に連れてくると芋を煮てつぶして茶巾にしたものをおやつに出したり、ちゃぶ台にクロスをかけて誕生日会をしたり、結城にはない文化を地域の子どもたちに感じさせる存在だった¹⁶⁾。

昭和二十年、日本は敗戦をむかえた。敗戦後、貴族院廃止に伴い、勝邦は貴族院議員の職を失った。可壽子は家計を助けるため成蹊女学校の同窓会で手伝いを始め、その後理事に就任した。昭和二十九年に成蹊女子高等学校を成蹊学園に合併する際には中心的役割を担った¹⁷⁾。父や夫が政治・外交に深く関



結城へ疎開中の可壽子と長男勝之

与するという環境で長く暮してきたことも影響したのであろう、可壽子は社会や時局に対する意見を強く持つようになった。可壽子のそうした意識は、本史料の冒頭にも見て取ることができる。また、昭和二十九年に発行された成蹊女学校同窓会会報にも、戦前から戦後にかけての社会の変化と女性のあり方について短文を寄せている。

：今の若い方々の様にしつかりとした社会観念もなく、フラフラと卒業して何の気もなく家庭に入ってしまった。そして女として与えられたものは、妻として母として自分のみの良さ家庭を築く事を、最上のよろこびとも幸福とも考えてすごして来たのであつた。昭和二十年、戦争の終結と共に日本の女性は男女同権と云ふ、女にとつてはこよない進歩を、認められた：この事は私達女性にとつては、最大のよろこびであつたが、同時に今までにないもつとも大きな荷を負わされた事であると思う。何故ならば権利と云うことは必ずそれに価する義務が裏付られて、主張されるのである：終戦後の女子に対する教育は、日本の大きな仕事であり又それ丈に意義のあることであると思う。⁽¹⁹⁾

二、政治家 長島隆二

長島隆二の生涯やその活動については、本史料で詳しく語られているが、ごく簡単に履歴を紹介しておきたい。

長島は明治十一年（一八七八年）、埼玉県に生まれ東京府立第一中学校を経て東京帝国大学法科大学に入学した。卒業後は大蔵省へ入り、日露戦争中はロンドンに駐在して戦時公債収入金の管理などを担当した。⁽²⁰⁾ 日露戦後は理財局国庫課長として財政経済整理に尽力し、第二次桂内閣で首相秘書官、第三次桂内閣では理財局長心得を務めた。桂の信認厚く、この頃、桂の三女である潔子と結婚した。

桂内閣が倒壊すると辞職し、大正三年（一九一四年）の補欠選挙で立憲同志会を基盤として当選、政界へ入った。しかし、長島は議会にて二個師団増設問題に反対の立場を取り、同志会を脱党した。以後、革新倶楽部、憲政会、新党倶楽部、政友会、無所属、と政党を渡り歩いた。こうした長島の動きに対しては当時から「おとなしくして、財政演説でもして居れば、将来屹度大蔵大臣になれるのにつまらぬ妄動をするものだから、信用を台無しにしてしまつた」とか、大隈から離反したことについて「無責任な忘恩者だ」などと批判の声もあった。⁽²¹⁾

ただし、長島の政治目標は、櫻井良樹が指摘するように「桂が行おうとした強力な外交政策を実現できる新党の創立」にあり、無節操に所屬を変え続けたわけではなかった。⁽²²⁾ 新党の創設に没頭する中、長島は大正九年の選挙で落選し昭和三年まで「長い間の浪人生活」⁽²³⁾ に入らざるを得なかった。

長島の政治活動において、対中外交は大きな位置を占めており、北伐が開始されると蒋介石を援助して閩内の統一を実現し、統一された中国との提携を強化しつつ滿蒙權益を確固たるものにしようと考えた。⁽²⁴⁾

日中戦争が始まると、一九三九年に長島は北平に移り住み和平工作に取り組んだ。長島は、中国には日本で教育を受け外交・政治の方面で活動する人材が多いため、そうした要人と結ぶことで現下の形成の打開を図らねばならないと主張した。⁽²⁵⁾ 彼は、「抗日に対する膺懲」というような「小さな問題」ではなく、「東洋永遠の平和」の実現のために日中の平和回復を願った。⁽²⁶⁾ 工作を進めるにあたり、長島はまず中国に拠点を作る必要があつた。それに協力したのが彼の義理の息子（可壽子の夫）水野勝邦である。勝邦が戦後に自らの中国経験を回想した短文には「義父長島隆二が対中国和平工作に乗り出したことから北京に公館を開設すること、なり、宮元利直（当時日本軍司令部顧問）の計らいで西城屯補胡同にあった中国人の邸宅（礪園）と表示あるを日本人を仲介にして賃借す」と書かれている。⁽²⁷⁾



水野公館内の貴族院議員皇軍慰問団一行

北平の西城屯絹胡同の水野公館前における記念撮影。勝邦を含む研究会所属の貴族院議員が戦地慰問を行った際のもの。左から、水野勝邦、丸山鶴吉、柴田兵一郎、穴戸功男。昭和16年撮影（一般社団法人尚友倶楽部所蔵）



華北慰問に訪れた水の江瀧子と勝邦

昭和13年に松竹少女歌劇団（SSK）のメンバーの華北慰問が行われた。現地では勝邦が接伴役を務めた。頤和園における水の江瀧子と勝邦の記念写真。

可壽子の手記によれば、長島は呉佩孚を擁立して蒋介石と手を握り、「日支和平工作の準備」を進めようとした。しかし、工作は呉佩孚が死去したことから失敗に終わった。その後、一時的に日本へ帰国し、「和平の途は蒋介石本人と直接に結ぶより方法がないとの信念を固め」北平や上海などを訪問し要人と折衝していたが、工作は実現しないまま昭和十五年（一九四〇年）に東京で脳溢血のため死去した。⁽²⁸⁾

三、回想録の史料的价值

この回想録は、あくまでも娘の視点から長島隆二の生涯を捉えたものであり、その人生の全貌を明らかにするものではない。とはいえ、長島の生い立ち、官僚としての活動と桂太郎との出会いから政界入り後の生活、また日中戦争開戦後に中国へ拠点を移して和平工作を展開した経緯、志半ばで死に至る様子が、可壽子自身の思い出や当時の生活などを随所に差し挟みながらまとめられている。同時に、旧結城藩水野家の生活史としての一面も備えている。また日中和平工作に関する情報など、断片的ではありつつも他の史料ではほとんど追うことのできない事実も含んでいる。政治に奔走し、家庭を顧みることのなかったように見える長島であるが、可壽子の文章からは娘思いの父親としての顔も見えてくる。孫にあたる上田和子氏は「ジイジ（長島隆二）はいつもお土産にプリンを持って来てくれるのが楽しみだった」と回想している。⁽²⁹⁾ その証拠に、水野家に遺された家族写真には好々爺のような表情をした長島が写っている。

本史料は、政界を渡り歩いた長島の人生を家族の視点から振り返ることのできる貴重な記録であるといえよう。

【凡例】

- 一、翻刻に際して、原則として旧漢字は常用漢字に改めた。
- 一、適宜句読点を補った。
- 一、誤字には「ママ」を附したが、慣用表現や著者が習慣的に用いている表記はそのまま残した箇所もある。

亡父を憶ふ——(日華親善を念願とした其の一生)——

目次

- 一、まへがき
- 二、母の遺訓に奮起した父の生ひ立ち
- 三、桂公の遺志を継いで　いよいよ政界へ
- 四、憂国の正義感……浪人生活に甘んず
- 五、世の誤解を心に耐へて戦ふ父　家庭愛への心尽し
- 六、父もいよく北京へ　積極的な努力
- 七、父と共に北京生活　始めて接した其の仕事
- 八、呉將軍謎の急逝
- 九、和平を念願……自ら重慶へと　大成を夢みつゝ逝く

亡父を憶ふ——(日華親善を念願とした其の一生)——

○まへがき

父(長島隆二)逝いて既に七年の歳月が過ぎた。其の間に大東亜戦争が起つたが、我と一億の努力も、遂^{ママ}きて敗戦と云ふ悲しき現在となつた。

昨年八月、ポツダム宣言受諾の詔書を拝した我等国民はひとしく涙を拭くひ、大君の御声の許に伏したのであつた。そして、に半ヶ年、聯合軍の進駐、戦争犯罪人の指摘、杉山元帥の死等、全ては歴史を目のあたり見るが如き変化の激しき時代の波に己の判断も正しきか否か迷ひ苦しむのである。昭和二十年十二月十六日、戦争犯罪人としてマ司令部から指摘された近衛公が突然出頭日の朝自決された。その遺書(近衛公手記)を読み、公の正しき判断を持たれて居られ乍ら、知らず／＼戦争の渦に巻き込まれて行く裏面の事実を知り、私は亡父の一生が如何に信念の正しく且つ誠なるものであつたかを思ひ、子としての父を此処に記して、世の人には勿論、子としても亦父の一生に疑惑の念を抱き誤つた判断を持つて居たことを詫びつゝ、父の靈に捧げんとするのである。

○母の遺訓に奮起した父の生ひ立ち

父は明治十一年十一月二十九日、埼玉県の一農家の次男として生れた。幼少はワンパクでいたずら者で手のつけようのない位であつたさうだ。十二才の時、母を失つた。重い病の床で母は十二才の父を枕元に招き、

『隆二、お前はこれからいたずらを止めて勉強して下さい。そして将来立派な人間になつて下さい。これが母の唯一の願ひです。』

と願の一言を遺して他界された。それ以来、父は生れ変つた人の如くに変わり、一心に勉学に励み出したのであつた。

この事は度々直接父から聞かされた。此の事を語る度毎に眼に涙をためるのであつた。十五才で東京に出て、勉強の甲斐あつて一中に入学出来た。頭脳の秀才であつた父は三学年終了後、一高に入り又帝大へと進み、大学卒業の時には御賜銀時計組であつた。大学当時の親友は不思議にも私の主人の父君、水野直、松平恒雄氏等の方々で、今に一緒に写した写真の数々等も残つて居る。明治三十五年、帝大卒業後、直ちに大蔵省に入りロンドンへ派遣され、帰国

して総理大臣桂太郎の秘書官となつた。間もなく日露開戦になつた。頭腦の優れて居たことや、正しき信念等が認められて桂公三女潔子（私の母）と結婚したのであつた。明治四十一年、長女である姉園子が生れ、私は明治四十四年六月に生れた。其の頃は桂公夫人の隠居処に予定されて居た芝区三田小山町の家を借りて住んで居た。

○桂公の遺志を継ぎいよく政界へ

大正三年、祖父桂公の死と共に祖父の遺志を継ぐべく官界を退き政治界に飛び込み、そして父の生活は波乱の最中に入つたのであつた。その頃は私達も幼少であつたし何事も子供には知らせない暖い家庭愛の中に大正三年生れた妹満寿子、大正五年生れた弟辰郎の、姉弟四人は仲よく明るく育てられたのであつた。その頃の父の支那に関する意見、信念は父の著書「政界秘話」に次の様に述べて居る。（昭和三年発行）

「孫文を援けた日本人」

孫氏亡命の時、氏を助けた我国の人々は、頭山満、犬養毅氏その他の諸豪であつて、始終好意同情を以てこれに向つてゐた。この事はまるで匿れてした事であるが、孫氏と一番早くから深い交友をなし、彼を師導し援助し鞭撻した人に秋山定輔君がある。

この交友関係は、秋山君が明治三十三年頃に孫氏の革命の快挙を助けるために、多数のピストルを靈南坂の君の邸宅で供給した時から始る。

この以後、孫文、秋山の両人は、断えず表となり裏となつて相結んで離れなかつた。此二人の交友は、恐らく何処の歴史にも一寸見られない程美しいものであつた。

孫氏は常に腹のどんだ底迄打明けて秋山君に相談した。孫氏一流のおだやかさ、和らかさを以て、然し内心には革命

の金鉄よりも強固な意思を以て細大漏らさず秋山君に語つた。」

「革命後の支那と日本」

今日迄の日本の対支方針では、革命後の支那に対して、何らの發言権を持ち得る理由が一つもない。日本政府の外交は絶えずその成功の妨害ばかりとした。又、支那革命に対する我国民の態度も無情冷酷だつた。従つて革命後の支那が、如何に日本に反感を持つても、我国には是れを非難する口実はないのである。けれ共革命後の支那に対して何事でも云ひ得る人がたつた一人ある。即ち秋山定輔君その人である。此の人だけは今日の支那に対して絶対無限の發言権を持つてゐる。田中首相は、自分の親交者の中にこの秋山君があるに拘らず、これを利用して事を知らずに意見を求める事も知らずに、対支外交を徹頭徹尾踏み違へてゐるのは何んと云ふ迂闊な事であらう。曾つての日、秋山君が官僚の巨頭桂太郎公に政党組織をすゝめたのは、支那問題を徹底的に解決したいためであつた……北京にある軍人や外交官が事実を誤解するのは未だしも、我国の首相及外相すら北伐の不成功を信じて居つたに到つては、滑稽と云ふよりも寧ろ悲惨である。

対支外交の失敗は部分的に見れば数限りがないが、斯る細目は問題外に置いて尚此の明瞭な大勢を見誤るに至つては逆も酌量の余地がないのである。

「南京遷都の意義」

革命後の支那は実に素晴らしい勢で活動してゐる。行政の都を南京に移し、北京を北平と改称したるが如きは実に痛快を極めた一手である。北京の古い建物の中で、古いテーブルに向ひ、而して古い制度、慣例に馴れた役人を用ひたのでは新興の意気生命が消滅して了ふ。仮令建物は粗雑でも南京の方で、ガラ明の部屋に椅子テーブルを並べ、旧い行政も手続も知らない様な若い青年が、新支那の政治を執る様でなければ不可いのだ。……

少し行為は乱暴の如く見えても、今迄の列国關係から断然脱却しなければならぬ。此意味に於て南京遷都は唯一無二の方策と思はれる。

『支那の将来』

細かな問題は一切説かない事とするが、支那将来の發達を予想すると、実に前途洋々たるものがあると信ずる。最初の十年間は、種々な準備時代であらう。内部の整理も必要であると共に、新しい制度も作らねばならぬ。……永く兵禍に苦んだ支那が、和平統一の状態に在れば、支那の富は非常な勢で開發されるに相違ない。あの無数無量の資源は、益々用意されて人の氣の着く頃には、支那の状態は驚く程の大變化を来す如く思はれる。どうも世間の人は、目前の事実だけしか分らなくて困る。将来につながる斯様な話をする、多くの人々は夢物語か何かの様に想ふが、決してさうではない、如何程行詰つた局面でも、何かの機会、舞台が一廻転すればすつかり別な局面が現れて来るものである。……

支那の富源の開發は、アジア全体の實力の發展となるのである。つまり是が世界的な大變化となるのだ。私はこの意味に於て支那革命の成功を眺め、此意味に於て凡ゆる問題の推移を觀察し、此意味に於て私自ら考へ且つ働いてゐるのである。』

『第二維新の大業』

議會に於ける私達の働きとその狙つて居る政治的計畫の内容は殆ど新聞では分らない。新聞は只月並の觀念を以て批判するに過ぎないのだ。或一方では両党を引摺つて大活躍をしたと褒める。かと思ふと或新聞では曖昧な誤間化しの遣り方であると非難する。が、只それをよく知つてゐたのは、少壮政客の人々だけである。現代の既成政党は權力又は金力によつて最大限度に迄膨張したが、その内容は全く空虚である。少数者なりと雖も真理に基いて進んで行け

ば彼らを蹂躪し得る時代が正に到達した。既成政党は此行詰れる難局―吾々は此を国難と絶叫したが―即ち国難を打開するの力もなく多くの者は現下に迫れる国難の襲来さへ感知しない程の無感覺であるのだ。今こそ正に新興勢力が勇敢に立つて、昭和戊辰の年に於て第二維新の大業に踴躍奮進しなければならぬ時である。』

最近私も此の父の著書を読み返し今更の如くに、父の先見の明のあつたこと、今日の日本あることを憂へて、如何に苦闘して居たかを知るのであつた。

○憂国の正義感 浪人生活に甘んず

昭和三年、姉は床次竹二郎氏長男正一に嫁した。私は十八才、成蹊高等女学校を卒業したのであつた。在学当時は何事も知らずに育つた。しかし此頃から父の政治家生活を判切りと眺め初めた。長い間の浪人生活は私達家庭も次第に苦しさを増して来たのであつた。然し母は何んな苦しみも子供達には少しも見せなかつた。少さい時からの習慣で政治家の家庭は父が宅に居れば来客に忙がしく、又外出すれば昼食は勿論、夜も父の顔を見なかつた。そして帰宅するのは夜半で二時にもなる。父と共に暮す日の少なくなつたのを淋しく思ひ初めた。其の頃、私の頭は父は一体何をしてゐるのであらう、父の生活は何の目的であるかと考へ、一人で考へ苦しみ初めた。それは後で知つたのであつたが、父の志を知り母に対してやさしい手を延して下されたのは山下亀三郎氏や、母の兄、井上三郎侯であつた。然し家計としては豊でなかつたが、母は家の為め子の為めにと、私に対してピアノ、活花、習字、裁縫、日本画等に心よく師を付けて女としての躰を磨かして下れた。父も忙がしい中をさいては子供等に読書力を与へ、又本の選撰にも色々工夫されてゐた。父から与へられた本は夏目漱石氏の万葉集、源氏物語、泉鏡花集、講談物等数々があつたと思

ふ。貧しいながらも母を中心に家庭の生活は実に暖く幸福であつた。然し相変わらず父は家を外に一日中クルクルと動き何の変化もなく、官界につく訳でもなく、財界方面に入るでもなく、只政治と動くのであつた。

○世の誤解を心に耐へて 家庭愛への心尽し

一体父の目的は何なのか、党を作つては壊し、選挙に出るのにも新党倶楽部から出るかと思ふと民政党になり、或は政友会に入り、遂には選挙区民迄も父の果しない浪人生活と、党を出たり入つたりする不貞節を見て大半は離反してしまひ、遂には捨てられることとなつてしまつた。そして落選の憂目を見るに至つた。然し父の信念は国の苦難を救はんとして夢中だつたのであつた。

然し県民からさへも捨てられた父は遂に世間からも問題にされなくなつた。政界の惑星、大きな事ばかり云ふ山師であるといはれた。私達子供までが父の厚望の何んであるかと疑ふ様になり出した。然し母のみは一言も父の行為に就いては語らなかつた。黙々として子供の教育にひたすら努めたのであつた。父の生活に疑惑の念は持ち乍らも父として子に対する愛の深さ、忍耐の強さにはしみじみと敬服するのであつた。私共四人の子供は父から憤り、怒りを受けた事は只の一度もなかつた。これ丈の頭脳もあり人格のある父が何うして世間に迎へられないのか、私の小さな考へは、政界から父を退かせるより途はないと思ふに至つた。遂に私は或る日父に向つて話した。

「パ、はどうして何のお役にも就かず、何を目的として働いていらつしやるの、只空しく歳をとつてしまはれるのは本当に悲しくなるわ。マ、だつてこんな事では何時まで経つても御氣の毒ですもの、もう良い加減で政治をやめて他の事をなさつたらどう」

その時父は笑つて答へた。

『可壽子、パ、の考へてゐる事は今の世の中の人よりもつと／＼大きな考へなのだ。此のまゝでは日本はどうしても滅亡するより途はないのだ。パ、にはそれが分かつてゐるので自分の身命を繕つくろして捨て、世の人と戦ひ、あくまでも早く皆が目覚めて貰ひ度いのだ。自分一身のことは何も考へて居ないよ。』と云はれた。

その時の私には何うゆう事か全く父の気持は解せなかつたのである。そして私も昭和七年六月に水野家に嫁く身となつた。嫁く前日の朝であつた。朝食を父と母と私と妹で囲みながら、私は又父に

「ね、パ、お願ひなの、私は明日から他家の人となる分ですけれども、どうぞ政治をやめて普通の方になつて戴き度いの」

父は笑つて答へ

『可壽子はもう他家へ行くのではないか、新しい生活に踏み込むのだ、此の家の事は関係ないだらう。』

「だつて私達がいくら幸福になつても一人で残るマ、が可哀想なものですもの、マ、に何時までもこんな思ひをさせ度くないわ」

と云つた。すると母が

『子供達が幸福になるならマ、は何にも苦勞は無いのですよ』

と涙をこぼされた。此の時父は思はず眼鏡をあげてハラ／＼と落ちる涙を押へられてゐた。自分の信念と志の前には何の不平も云はず、三十年間つれ添ふ母に対しては、父も胸が一杯になるのであつた。そして私は水野家に嫁いだのであつた。嫁いだ身として父の生活とはすつかり離れてしまつた。只折々に生れた子供を見せたりたゞ表面の交際文はしてゐた。

○父もいよ／＼北京へ 積極的な努力

昭和十二年、支那事変は起つた。翌十三年、主人水野は外務省より研究員として北支那北京留学することになった。その頃、私は四才の長女和子と七月生れる筈の身重の体で三月出発する主人を送り東京の留守を守ることになった。二、三年はあちらで暮すと云はれた主人を送り、主なき家の淋しさをしみ／＼味はふのであつた。然し主あつて主なき家に三十年間守りつゞけた母の無言の教へがしつかりと私の胸に刻み込められて居た。

そうだ此の時こそ私は家のため、子供のために尽すのである。これこそ夫への大きな努めが果されるのだ、私としての大きな力であると思つて、一心に守つたのである。

其の頃、父も北京へ行つた。父と主人と二人でうつした写真等送り届けられた。主人が出發して半年、私は次女順子を産んだ。この可愛い二人の子を育て、留守を守ること十ヶ月にして不幸次女順子はかりそめの疾で急逝したのであつた。初めて子を失つた悲しみ、然も主人留守中の事であり、私は身も心も砕けるばかりに悲しんだ。北京から帰へつた主人も告別式を済せて又直ちに出発して行つた。そして北京からも悲しき父の悔み状も届いた。あまりの心の痛手に、毎日涙で送る私のために、父と主人とは北京に家を借り、私の心の転換をはかるべく私と長女和子とを招いたのであつた。

其の頃父から寄した手紙の内に

「順子の死去の報を受けて、パ、は心からがつかりしました。然しこれも人生の戦ひです。苦しい事は人間としての試練、すべて人間として磨くべき段階なのです。必ず打勝つて下さい。パ、も今北京で大きな仕事に働いてゐます。成功の暁には桂御祖父様の墓参も心から出来る事と大志を抱いてゐます。北京へ御いでの日を待つ」

と記してあつた。

○父と共に北京生活 始めて接した其の仕事

私達もいよいよ北京へ。それは若葉まばゆきばかりの五月。長女和子を連れて出發した。五月九日、北京に着けば駅頭に父も出迎へて来れ、父と共に楽しき生活をする事になつた。初めて見る北京、初めて味ふ支那家屋の生活、支那の人々の性格、見るもの聞くもの総べてが新しい事ばかりであつた。そして相変らず父は来客や訪問で毎日忙しく暮して居た。

其の頃父は当時の陸軍大臣畑俊六大将の内意を受けて北支那に呉佩孚將軍を中心に新政権を樹立して、蔣介石と手を握り日支和平工作の準備を進めて居たのであつた。支那の要人孫潤宇、李景鈺氏の如きは毎日の様に父を尋ねて来られた。或は又、しば／＼呉佩孚の公館へと招かれて行つた。昭和十四年六月には日本から時の政府の内意を受けて父の許に津崎政務次官が来られた。事は秘密裏に、或は萬壽山に、或は北海公園に会しては工作は進められて居た。

初夏の北京は美しかった。忙がしい中をさいて、父は私達を連れて芍薬の花咲く中央公園へ、又は水美しき北海公園に舟を浮べて心ゆくまで支那のよさを楽しみ味はつたのであつた。

「あ、い、心持ちだ、可壽子、パ、は此の仕事が出来上つたら、政治から手を引いて此の大陸に住むのだ。パ、の生涯を打込んだ此の支那の地に骨を埋めるのだ」と語つて居た。

私達一家のもの共や、日本から写生遊行に来られた石山太柏画伯、小宮山氏等と毎日共に院子（中庭）へ椅子を出して、紺青の空の下に香よき支那茶を飲み乍ら、よく日本人、支那人の性格論をして花を咲せた。然し平和な生活は

やはり続かなかつた。其の頃主人は貴族院議員に当選したので私達は一先づ帰国することになった。私達の出發の予定日の一週間前の夜、父は私を招いた。父の室へ入ると、あわたしく荷作りをして居る。そして私に

『パ、は明朝早く北京を出發する。若し何事かパ、の身にあらうとも政治家として立派に倒れるのだ。案じてくれるな。マ、の事は頼む。無事であれば大連で又会はふ。誰にも云はないでくれ』。

と云ふ言葉を残して翌朝早く未だ私達の目覚め中に北京から姿を消したのであつた。

○呉將軍謎の急逝

後に知つた事であるが、呉將軍を立てる和平工作の準備を進めて居た父の行為に対し、当時山下奉文中將（北支軍參謀長）等の王克敏を援けて居た一派のものは、スパイ行為となして防害、憲兵の手で圧迫しようとしたのであつた。それをいち早く支那の要人側から父の許に知らせたのであつた。大事な時に事危しと山下將軍の探索の目を逃れて父は北京から姿を消したのであつた。当時何事も知らない私は、消息絶えた父に対して只々不安の日を過してゐた。その内私達も帰国の日も来たので予定の通り北京を出發し天津から船に乗り大連の港に着いた。速く見える大連の波止場、私はもしかと父の姿を探した。瞬間、茶のソフトの帽子を高々と振る父の姿を見出した時、私のほ、は熱い涙が流れてゐた。これ程まで苦心した和平工作は遂に其の後は進められなかつた。

秋十月、私達は再び主人の居る北京へ向け出發した。然し東京で用のある父は行く／＼と云ひながら北京には中々姿を見せなかつた。

昭和十四年十二月、呉將軍の死は突然報ぜられた。死因は抜歯より起きた敗血症との事で全く急性のものであつた。父の望みもこゝで崩れてしまつたのである。其の後私は弟や父の末弟等と父に対する批評を下したのであつた

が、その結論は

『父は確かに先の見通しのきく天才的政治家であるが、世間から認められず、又現実とかけ離れ過ぎて居たのは一種の理想論者、空想家なのであらう』と。

然し今深く考へて見ると、父の考へてゐた事が正しかつたのだ。目前の見える人はあるが先方の見えない世の人々にはこれが分らなかつたのである。

○和平を念願 自ら重慶へと大成を夢みつ、逝く

昭和十五年一月、阿部内閣は総辭職した。後継内閣の本命は一度畑大將に降下あると見えたのか參内された。しかし本命は米内光政大將に降された。父は畑大將の武人らしい武人であると同時に、思慮深き人格を常に敬慕してゐた。又畑大將も父の意見をとり入れてしば／＼会見して居た様であつた。其の年、私は三女瑛子を産み、順子なき後の瑛子の誕生を父は心から喜んでくれた。

此頃、父は再び支那に渡り北京に上海にと今度は飛行機で大陸を飛び廻つて居た。その頃の父の志は、和平の途は蒋介石本人と直接に結ぶより方法がないとの信念を固め、蔣と親交深かりし朝鮮志士の申錫雨氏等を通じて自らも単身重慶へ乗り込む覚悟でゐたのである。

其の年九月三十日午前、帝國ホテルを事務所として居た父から電話がかゝり

『可壽子、パ、は近い中に遠い所へ出發する。御宅に預けてある鞆をホテルまで届けて下さい』。

何かなく父の声が力無く聞えたのであつた。それから三時間後、父は北京から入京する孫潤宇氏を東京駅へ迎へんとしてホテルの自室で脳溢血で倒れた。しらせを受けてかけつけた時は、ワイシャツのまゝ、ベットの所で父は重態と



長島家の女性たち

左から、長島（水野）可壽子、長島潔子、長島（長崎）茂子、長島（床次）園子

なり昏睡状態に落ちてゐた。母初め子供の看護の甲斐もなく十月八日、日華親善、東洋平和の爲め、否、世界永遠の平和を夢みつ、莞爾として此の世を去つたのであつた。

後に遺されたものは物資としては何一つなかつた。しかし「たゆまざる誠の心」は私達への無言の教と戴いた。

*史料には、犬養道子⁽²⁰⁾による以下の手紙が挟まれている。

御返送大そうおそくなりまして申訳ございません。細々とお書きになりましたもの、やはり直接の当事者の言葉というものは、心を打ちますし、迫力に満ちて貴重な文献でございます。有難う存じました。三月廿九日 犬養道子

本史料紹介の執筆にあたり、上田和子氏、水野勝之氏から様々なご教示を頂きました。掲載写真については、上記ご両名と水野節子氏からデータの提供を受けました。翻刻の校訂には国史学科二年、手倉森結南さんのご協力を得ました。記してお礼申し上げます。

なお、旧結城藩水野家の近代史料（水野勝邦旧蔵史料）は、平成三十年に水野家から学習院大学史料館に寄贈された。史料群の概要については、拙稿「史料紹介 水野勝邦の中国研究関係資料」（『学習院史学』五十六号、平成三十年）を参照されたい。

註

(1) 表紙に「昭和二十一年記」、本文中に「昨年八月、ポツダム宣言受諾の詔書を拝した」との記述があることから判断。ただし、可壽子長女の上田和子氏・長男の水野勝之氏によると書かれたのは昭和二十三年～三十年代前半頃であるという。書き始めから最終的な脱稿までにタイムラグがあつた可能性がある。上田和子氏・水野勝之氏へのメール聞き取り（令和二年十月二六日・八日）。

(2) 水野可壽子についての聞き取り調査は上田和子氏と水野勝之氏を対象とし、令和二年十一月二十四日にオンライン会議システムZoomを用いて実施した。以下、聞き取りに基づく記述は「水野可壽子についての聞き取り調査記録」と記載する。またメールによる聞き取りも行い、注では受信日時を示した。

(3) 家系図上は妹にあたるが、可那子は井上馨の養女であり、また勝之助も馨の兄である光遠の長男（後に馨の養嗣子）であるため、両者に血縁関係はない。

(4) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。

水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」…長島隆二についての回想（長谷川）

- (5) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。
- (6) なお、父である床次竹二郎の家は麻布区三河台町（現在の港区六本木）にあった。「水野可壽子についての聞き取り調査記録」、上田和子氏へのメール聞き取り（令和二年十二月九日）。
- (7) 和子の命名は、漢学者の塩谷温しほやのむねによる（「水野和子命名書」昭和十年、上田和子氏蔵）。塩谷は学習院と東京帝大で水野直の同窓であった。また水野勝邦は帝大進学後に塩谷の薫陶を受け、中国研究の道へと進んだ。塩谷は親子二代にわたり水野家と縁があった。
- (8) 大河平公子編「やよひ」第六号（やよひ会、昭和十年）。やよひ会は成蹊女学校の同窓会。
- (9) 可壽子は順子を追悼する文集を私家版として出版している。その装丁は日本画家の石山太柏が手掛けた。石山は写生旅行で中国に滞在し長島や可壽子らと交遊したことが回想録に登場する。
- (10) 夫妻は共にドイツのウィグマン舞蹈学校に学び、日本におけるモダンダンス普及に足跡を残した。詳しくは桑原和美「江口隆哉とその周辺」（『舞踊學』一九九九、平成十一年）、同「宮操子の半生と戦地慰問」（『就実論叢』四十一号、二〇一一年）を参照。
- (11) 上田和子氏へのメール聞き取り（令和二年十二月七日）。なお、上田和子氏も幼児部に入り、軍歌などに合わせてダンスをしていたという。
- (12) 大谷（水野）博は昭和三十五年（一九六〇年）に松竹社長に就任した（『人大谷博』『朝日新聞』昭和三十五年四月十六日）。
- (13) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。なお、ターキーを始めとする松竹少女歌劇団（SSK）が日中戦争の戦地慰問を行った際には北平に駐在していた水野勝邦が案内役を務めている。SSKの慰問については、拙稿「史料紹介 水野勝邦の中国研究関係資料」（『学習院史学』五十六号、平成三十年）を参照。

- (14) 草野昌悦尼は、明治寺を開いた草野榮照尼（慈雲榮照大法尼）の実子。榮照尼は明治四十五年の明治天皇の崩御に際して政財界や梨園などから協力を得て石造の観音像を建立し、大正元年に開眼供養を行った。榮照法尼の死後、昌悦尼が坊守りを務めた。北川継子「百観音・明治寺縁起」（『大法輪』十一月号、昭和四十一年）、宗教法人明治寺ホームページ（<http://www.meijidera.com> 令和二年十二月七日閲覧）。
- (15) 上田和子氏へのメール聞き取り（令和二年十二月七日）。
- (16) 水野直は、大正時代の一時期、池袋の猿田彦大明神を深く信仰し、結城の城跡に黄金があるという「宣託」を受けて埋蔵金発掘を行った。この時、工事に従事した人足小屋として建てたものが水野家の疎開先になったのである。水野直の信仰と埋蔵金発掘については、直の死後にまとめられた談話集『水野直子を語る』（私家版。平成十八年に尚友ブックレットとして復刊）に牧野忠篤と白川資長の証言が掲載されている。水野直に関しては、西尾林太郎「貴族院議員 水野直とその時代」（芙蓉書房出版、令和三年）を参照。
- (17) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。
- (18) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。ちなみに現在、成蹊大学図書館には江戸時代末に新宮藩主水野忠央が編纂した『丹鶴叢書』一五二冊が所蔵されている。これは、水野直が収集したコレクションを昭和二十六年に水野勝邦が寄贈したものである。「丹鶴叢書」については、児玉千尋「紹介・成蹊大学図書館所蔵『丹鶴叢書』（『成蹊國文』四十九号、平成二十八年）を、水野直による収集の経緯については上田和子「丹鶴叢書をめぐって」（『聖心女子大学史学部OG会会報』二十三号、平成元年）を参照。
- (19) 『やよい会々報』No.6 昭和二十九年七月二十五日、二ページ。成蹊学園との合併にあたって寄稿したものである。
- (20) 横山雄偉「加藤高明論其他」所収「長島隆二論」（上田屋、大正六年）一六三ページ。
- 水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」…長島隆二についての回想（長谷川）

- (21) 同右「長島隆二論」一六八ページ。
- (22) 櫻井良樹「日中提携と「国民的新党」の創設」(『日本政治学会年報 日本外交におけるアジア主義』岩波新書、平成十年) 九十二〜九十三ページ。長島の生涯を通じての政治活動や政治思想については本論文を参照。
- (23) 水野可壽子「昭和二十一年記 亡父を憶ふ」。
- (24) 前掲「日中提携と「国民的新党」の創設」一〇〇ページ。
- (25) 長島隆二「支那事変と世界戦争の危機 日英戦争?」(長谷川書房、昭和十二年) 一〇七〜一〇九ページ。
- (26) 同右、一一〇ページ。
- (27) 水野勝邦「中国研究の履歴書」(作成年不明、学習院大学史料館蔵)。なお、中国における水野勝邦の活動については、拙稿「『研究会史』著者 水野勝邦―中国と貴族院研究に捧げた生涯」(尚友俱樂部編・水野勝邦著『貴族院会派(研究会)史 昭和編』芙蓉書房出版、令和元年)を参照。
- (28) 前掲「亡父を憶ふ」。
- (29) 「水野可壽子についての聞き取り調査記録」。
- (30) 犬養毅の孫、犬養健の長女。昭和と平成にかけて評論家として活動。飢餓や難民問題に取り組んだ。

〈正誤表〉

155 ページ

上段写真



正：前列左より、平松廉子、水野貞子、水野勝邦、水野可壽子、水野顕。後列左より、大谷隆三、大谷ツネ、大谷(水野)博、大谷トシ、大谷竹次郎。昭和11年〜12年頃撮影。

誤：前列左より、平松廉子、水野貞子、水野勝邦、水野可壽子、水野顕。後列左より、大谷隆三、大谷トシ、大谷(水野)博、大谷トシ、大谷竹次郎。昭和11年〜12年頃撮影。